

# きょうと福祉俱楽部だより

## 2009年3月号

障害を抱えて生きていくこと  
介護される者から見たヘルパーという仕事

私の家は、両親が揃って、正社員として定年まで働かせていただきました。

私が23歳まで両親が働きながら同じ筋肉の病気で、車イスの私たち姉妹の面倒をみ、お風呂、トイレ、起床、就寝介助をしてくれていました。昼間は作業所で二人とも働いていたので、それ以外はヘルパーも使わずに家族だけで暮らしていました。

私が23才の時に、母が腱鞘炎、父の腰痛、などで入浴介助からヘルパーさんが入ることになりました。家にはその頃リフトの設置もなく、人力で入浴介助をしていただきました。

ヘルパーさんは真冬でも、半パン、Tシャツ。で真夏は汗でだくだくになりながらお風呂に入れてくださいました。

時を経て、私は、37歳となり、元気だった父もガンで66才の時、亡くなり今では7ヶ所ほどの事業所に介護派遣していただいて生活を支えてもらっています。

ヘルパー派遣をはじめて依頼して14年経ちますが福祉も基礎構造改革がなされ福祉施策も措置から契約の時代となり、ヘルパーの制度も障害者福祉行政の中で現在では多層化しています。重度訪問介護、身体介護、家事援助、移動支援など、生活のニーズに見合った派遣が京都市内で行われています

自身も障害のある自立生活研究所所長の谷口明広氏は、ある研修で、これからは、ヘルパー制度を利用して、障害のある者がしたいことをする時代だと言われています。重い障害のある者でも地域で生活できる体制もできつつあります。

しかしその一方で、ほとんどの事業所は、今、慢性的なヘルパー不足に悩まされているのが現状です。私自身も数多くの事業所に頼らずにはいられないのは、そのためです。

その原因は何かここではあえて書きませんが…。そんな中で、日々の暮らしを支えて下さるヘルパーさん障害のある者や高齢者の暮らし、つまり生命を支えておられる重くて厳しい仕事で、責任もリスクも大きい心身ともにハードな仕事です。看護士などと比べるとヘルパーの仕事は軽んじられる傾向がありますが…。

「家」という生活の場の中に入って多様なニーズに応え働く姿には看護士とはまた別の質は違いますが大きな責任を伴った仕事だと思います。尊敬します。

ヘルパーさん、いつも心からありがとうございます。

そんな私から、ヘルパーさんへ山口百恵さんの「秋桜」の歌詞からこの言葉を送ります。

「ありがとうの言葉をかみしめながら生きてみます わたしなりに」

あなたの声 投稿お待ちしています♪

みなさんの身近に起こったエピソードやイラストを募集しています  
こんなこと知って欲しい、やってほしい、ご意見、ご感想 etc…  
なんでもOKです( ^ ^ )  
イニシャル 匿名希望 OK きょうと福祉俱楽部 おたより係



## たったひとりのためだけにできること

くすの木労務経営管理事務所  
所長 楠木 仁史

以前京都府下の350床、労働者数400名の保険医療機関(病院)に勤務していたことがある。そこで調度課長を命ぜられていた時のことだ。調度課とは院内で使用する備品について業者と価格交渉を行い、少しでも安価に購入することが主な業務である。

その扱う物品は鉛筆、トイレットペーパーから1台数億円の医療機器まで実に様々だ。

ある日、課長である私に病院幹部より特命が下りた。

「糖尿病患者様がお使いになっている自己血糖測定器(以下測定器)の機種を統一し、経費の削減を図れ」というものだ。

重篤な糖尿病患者は体内血糖値を制御するインスリン分泌機能が低下しているため、自分の血糖値を絶えず自身で把握し、インスリンを自己注射することによってコントロールしなければならない。

この値によって、インスリンの投与量が決定される。これが多すぎたり少なすぎたりすると、場合によっては、極めて「深刻な事態」を招く。この「深刻な事態」とは、すなわち「死」を意味する。よって糖尿病患者にとっての測定器は絶えず携帯する第2の心臓、命の次に大切なものと言っても過言ではない。

私はさっそく複数社の担当者と面談し、見積もりを取り、操作性や信頼性を確認し、患者様個別にご説明申し上げ、数種の機種からひとつを選び、まさに決定を下そうとしていた。そんなある日、Aさんが私に面会を求めて来られた。

Aさんは高齢で、その病院に永く通院されている糖尿病患者さんだ。

AさんはT社の測定器を何年にもわたりお使いだが、

T社の測定器は、あいにく私の選定から漏れていた。

私の目の前に現れたAさんは、杖をつき脇をお孫さんに支えられ、一目見て重篤と判断できた。

Aさんの目的はただひとつ、「今まで使いなれた測定器を変更しないでくれ」というものだ。「病状が進行し、日常から手の震えが止まらず、今更、この歳になって新しい測定器の使い方を学ぶことなどできない」と。



Aさんがお帰りになった後、一連の会話を反芻し、ハンマーで頭をひどく叩かれたような気分になった。

経費の削減は企業にとって大切だ。

この業務で削減できる費用は、私の試算では年間数十万円。厳しい保険医療機関の業界においては、決して無視できるものではないが、他の方法でも削減可能な金額だ。まして、たった一人とはいえ患者様にご不便をおかけしてまですることではないと判断した。

Aさんをはじめ、お申し出いただいた方には、従来からお使いの測定器をご提供できるよう病院側と折衝し、結果としてそのようになった。

私がAさんのためにしたことは、ほんの小さなことだが、Aさんのためになつたはずだ。それは間違いない。

普段は、「患者様の利益を最優先」、「地域医療の充実に貢献」などと言いつつも、私は小数を切り捨てるようなことを平気でしようとしていた。

介護、看護、医療、福祉の世界に「画一性」などない。たとえ疾患名が同じでも症状はおひとりおひとり異なっている。

発症時期、性別、年齢、合併症、生活習慣、ご自宅の間取り、同じものは何ひとつない。

このことで自分は大きく成長した。

Aさんは決して「特例」ではない。いわば「普通例」だ。

現在私は、社会保険労務士として、個人の方や団体の代表者の方とお会いすることが多いのだが、今後も「業務の画一性」にとらわれることなく、その方にとって「最良の仕事」をしていきたいと思う。私にこのことを気付かせて下さったAさんに、心から感謝する。

有限会社 おとくに福祉研究所

**きょうと福祉俱楽部**

〒617-0824

長岡京市天神4丁目7-12 ハイツ東台101号

TEL 075-958-2560 FAX 075-957-2808

E-mail kyoto-care@club.email.ne.jp

